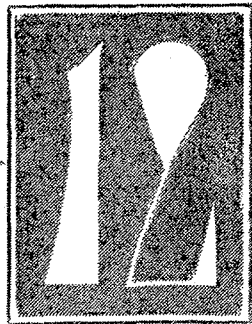


# 彷徨

— 1954年11月 —



都立西高等学校山岳部



# 部 報 徬 徨 才12号

## 目 次

積雪季 鷄扇尾根より奥秩父主脈報告 (1954年3月)

|           |                 |      |
|-----------|-----------------|------|
| 偵 察 (才一次) | -----           | (2)  |
| ” (才二次)   | -----           | (3)  |
| ” (才三次)   | -----           | (4)  |
| 行動報告      | ----- 林武志・福田宏二郎 | (6)  |
| 食糧 ”      | ----- 京田守弘      | (12) |
| 燃料 ”      | ----- 佐伯岩夫      | (14) |
| 後 記       | ----- 福田宏二郎     | (15) |

都立西高山岳部史 ----- OB会 (16)

1953年度山行集成 ----- (18)

部員・OB名簿 ----- (22)

巻頭 高校山岳部雑感 ----- (1)

編者後記 ----- (21)

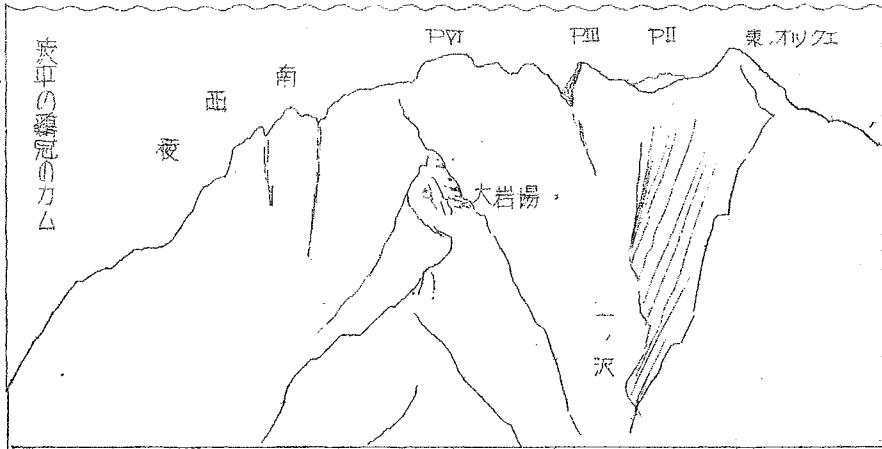
### 1954年度後半山行計画

オ75回 スキー合宿 (1月2~6日)

オ76回 鹽取山々頂幕営訓練 (1月15~16日)

オ77回 中央アルプス 三澤岳より室剣岳駒ヶ岳 春山合宿  
(3月17日より約10日間)

オ78回 創立十周年記念・新人歓迎会 (4月29日頃)



### 高山山岳部論雑感

★

此処に我部宿願の積雪期鑿冠尾根より金峰山の報告持廻を贈る。高山山岳部の論議やがましい今日、西高は西高としての行き方をとつて来た。二五年新しい部の行方が芽生えとから幾つかの統一派とハイキン派との斗争があつた。が茲にアルパイン派の憤熱の勝利に帰した。

★

每人78号(十月号)で高山山岳部の産談会が設つてゐるが、我々の提示した諸向題に何も突込んでいないので、口さ、か歯がゆい。オーに夏山台宿の目的すら雲をつかす極である。こんな目的とか、部、そのものの根本を論議してゐる馬鹿者は我々だけなのであろうか。

我々として是非考へなければならぬことは、部の存在意義である。部員にとつて部存在の必要性があるのにならぬのが、校友会費より運動部に割当の一割強、しかも校友会中、野球、文ツチフットボールと共に予備部才一位を占める我々が単に審見のみを自当に部を構成してゐる訳ではあるまい。部員でハツチリ解決されてゐる向題なのだが、我々の何人が口つきりした部員をもつてゐるのだろうか。来るべき春山を前にもう一度部員同志、せして他校とも意見と交換してみる事がある。

★

今年の冬山上州武蔵岳で行つた時のことである。BHの上原山ノ家で我々の部屋に空糸が入り現金を八名から計一万八千円盗まれた事件が起きた。その時のことである。栃木県の有名な某高山岳部とB連が血相を度えて部屋にこもりもなく押込み「此所は俺達の庭も同然だ。俺達が警察の嫌疑を受ける覚へのない。何とか返答しろ。俺達の口高だ。面喰つたのは我々だつた。何かの手違いでしょう。Cしが来次才改めて謝りに上ります」と頭さ下るのに対し、成犬高めのさちらす次第。高山山岳部の全部がもつと紳士的だと解しゃくしては我々は呆然としてしきい、じきに表しよつたのは不快さを覚えた。一部の高校であろうが我々は地元のこのボス的高校の存在を悲願すると共に「ヒマラヤへのオーのケルンとする云々」の非火聖人の體の覆けなし登山者を自衛する彼等に要求する極に我々も高校生らしさを静かに反論しよう。

# 積雪季 鷄冠尾根より甲武信・金峰山

——一九五三年度春山——

今でこそ完全に南小沢と奥秩父の山々の中にあつて登山する者に忘れられ孤  
立してゐる山に小川山、白石山、鷄冠山の三者がある。一九五〇年七月五名  
の部員が東沢を南行し、その神秘的な原生林、名の如くそびえ立つ岩峰、数  
十米を落下する巨大なナメキを見てより、この山を研究して見ようとす願望  
が期せずして部員の口にはのぼり、バリエーションからの積雪期主脈に目標を  
置いた。文献は石楠花山岳会(山と溪谷一〇一号)のものが唯一でしかも甲  
武信へのラツシユアタックであり、主脈縦走への足場とせんとする我々にと  
つてこのトサカ尾根の積雪期重裝備の準備は全く未知に等しかった。重裝備  
の可否を解決すべく三回にわたる偵察によつてこの山の複雑な面も次々にわ  
かり又石楠花山岳会のルート図が誤つてゐる事も判明した。

この概にして三月、過去三ヶ年の雪山の経験でこの計画を期すべく其満、三  
年生の入試を待つて十一名のメンバーで決行。結果は意外な雪少で、緊急で  
川下トサカ主要部分のアレートはを程の困難もなく通過、幸運に徳まれて九  
日間にして全計画の完遂をみた。

偵察 (オ一 次) 待窪オ一 号

▲ 一九五二年七月一五日(二〇日)

▲ メンバー 林武志(C.L.) 福田宏二郎(S.L.) 岡谷徹(S.L.) 下出重遠

川村宏、佐藤忠彦、松崎甲平、米野弘郎、小田尚彦

(OB) 笹山英次、田中英、田中博利

計二一名

オ一 次偵察としては戸渡尾根よりその全貌を知り、上下より後線を出発  
するだけトレースする事にし夏山合宿の直前に行つた。

七月一五日(雨)

塩山(〇九三五)——徳和(一三〇〇)——茨平日原氏宅(一七〇五)

七月一六日(ガス)

A 田中英、福田、川村、佐藤、松崎、米野、小田

BH(〇五〇五)——マク沢(〇六〇〇)——木賊山(一〇二〇)

一一〇五)——甲武信岳往復——雁坂峠(一四〇〇)——BH(〇五

三〇)

B 善田、林、岡谷、下出

木賊山(一一〇五)——引返東(一五一〇)——木賊山(一八二〇)

——釜沢ヴィバーク(一九〇〇)

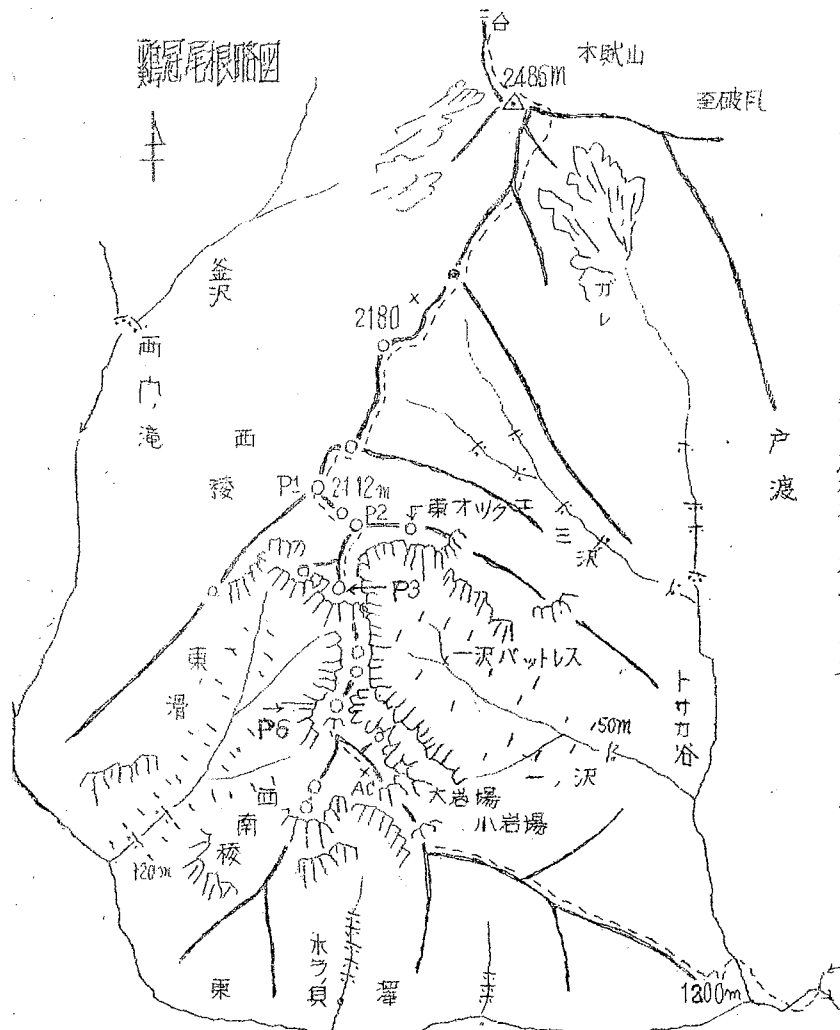
終日ガスの漏戸渡を登るもトサカ山脊を見せず。Bは木賊山頂よりナ  
タメを入川つ、下路したがガスの切目よりトサカ尾根が山頂からでは  
なく破山よりの肩から派生しているのに気づきトラバース、上部は石  
楠花の猛烈なブッシュと原生林で尾根の走向がガスの為判らず二一八  
〇米ピークより引返し釜沢に下りヴィバークする。

七月一七日(晴后ガス)

A 両門滝往復

B BPP(〇六三〇)——両門滝(〇八五五)——九四三)——FI(

鷲尾根略図



一一〇〇——出合下にて本隊合流(一一二五)——東 滑試登——  
 BH(一七三〇)——  
 OB田中(舟)来る  
 七月一八日 雨  
 田中、田中、善田、林、福田、南谷、川村、小田、松崎  
 BH(〇六二五)——トサカ尾根未端取付(七三〇)——小岩場(〇  
 八五〇)——大岩場(〇九一〇)——取付處(一〇三五)——  
 BH(一一四〇)  
 急な森林帯をナタメを入れつゝ登る。石楠花の密生は女寸ばかり、小

偵察

(オニ次)

岩場は簡単に登り、いよく向標の大岩場である。アンカインして取  
 付くも一次でスッパリと切れ豪雨のため逆戸気味のスラフ状の岩は違  
 とわり危険を感じ引返す。一、沢奥とCOMBはガスに隠れて実  
 せし惨状形相であつた。午飯、下出、川村、佐藤、小田、水野帰京  
 七月十九日 曇雨  
 昨日にも増すすさまじい雨。笛吹川の増水甚しい。一次偵察を打ち切り  
 豊取至由帰京の途につく。

- ▲ 一九五三年八月十九日(二二日)
- ▲ メンバー 川口和雄(上) 岩崎元子 宮上和正
- 坂井定雄 OB田中哲利 計五名
- ▲ ギヤル三本 ミツ道具一式 テント一張 他
- 大岩場の騎上可能ルートの見及ADVANCE・C  
 地奥の偵察を任務とした。
- 八月十九日 (小瀬后くもり)
- 廬山(〇九三〇)——(一一四五)——三富(一一三〇)
- 日原氏宅(一五二〇)
- 八月二十日 (晴)
- BH(〇七三〇)——東次(〇八一〇)——大岩場
- 下(一一三〇)——上(一三〇〇)——
- P6(一四三〇)——大岩場下(一五五〇)——BH
- 東次(一七二〇)——BH

(一七五五)

大岩場のルートは確実にするため一応荷を降して登ることにする。大

岩場にて前登取付いたルートは荷上不可能なること知り、田中、川

口にて石楠花谷の取ったV字状泥ガリより取付き東天側のバンドを

トラバースして上に出る。岩の規模は伝えられてはいるよりもすこ

とく其高約百十五米、傾斜五〇度位、所々に蘗葉樹が生えてはいるが一

つは側は完全な崖戸である。アツサイレンにて下降、倉倉田中、川口

が山の氷一本フイックスし密上、飯井が荷上する。約六費で可能。

PGを往復、この岩場は東天側より取付く。ピークからはPGのノツ

ペリしたフエースが夕日に映え美しかった。

本月二二日 (晴)

宮上が定どネンバした力で四名で午前中雁抜峠へ行つて来る。夕刻帰

途につく。

偵察 (オ三 次)

一九五三年一〇月二五日、二八日

▲ メンバー 福田宏二郎(シ) 米野弘毅

▲ ギヤ(北四〇米) 一、シヨラフニ、バーナー

▲ 地形の確認のみになった。オニ次によって唯一の研究文献として発表さ

れてはいる石楠花山岳会のルート圏と我々の作成したそれとに大きな差が

あるのが発見されたからである。結果は我々の方が正しかったことが確

確された。

一〇月二五日 (晴后小雨 上は晴)

塩山(一九三〇)——三富(一九五〇)——茨原日原氏宅(一九〇〇)

秋たけなわの笛吹川の荒れと雲を呼ぶトサノのガムがすこい。

一〇月二六日 (晴后ガス)

茨原(〇七三〇)——大岩場(一〇三〇)——P6(一三

〇〇)——P1(一五三〇)——ウイヴァーク(一六三〇)

凍えそうな笛吹川の流れを渡りし尾根の末端にとりつく。大岩場まで

は二面の偵察で立派なナタメ径となった。大岩場は前面のルートを取

荷に振られて所持は良くない。E峰は正面に登る。三峰フェース直下

で鋭いアレートであるが所々にシラビソの小樹があり困難と云うもので

はない。三峰フェースもE峰で見る程でずかしくなく傾斜はかたまりある

が二段のテラスがありサイルを用うまでもなく登る。落ちれば東、碧を

垂直に近い落下線を画して七〇〇米下の東天側まで落ちる。三峰を過ぎ

れば石楠花のブッシュと深い原生林となりガスも出て来たので本峰を少し

行ったヤセ尾根でオカンする。

一〇月二七日 (快晴) 石時氣温マイナス五度

BP(〇八〇〇)——木賊山(一一〇〇)——二二〇〇)——雁抜峠(一

一五〇〇)

ヤセ尾根をしばらくたどると三二八の峰であった。深い原生林と大

の太木との苦斗の後フカフカした苔を踏んで木賊の右肩に出た。後は被

陽を背に雁抜へ行く。

一〇月二八日 (雨)

雁抜(〇七〇〇)——三富(一一〇〇)——塩山

▲以上三次にわたる偵察の結果、積雪期成功への大きな自信を得た。

積雪期鶏冠尾根より金峰山

一九五四年三月二十七日、四月四日

△ メンバー

チーフリーダー 林 武志 三年  
 サブリーダー 福田 宏三郎 三年  
 岡谷 徹 三年  
 川口 和雄 三年  
 米野 弘躬 三年  
 岩崎 元子 三年  
 下石坂 勝至 二年  
 池田 務 一年  
 京都 市弘 一年  
 木下 康彦 一年  
 佐伯 岩夫 一年  
 田口 毅 二年

△ 食糧

米 一斗五升 以化米四五升 コツペパン一〇二個 即席餅三八  
 鶏(ニ斗弱) ビスケット六〇〇枚  
 野菜三袋 コンドーフ、ベーコン パター ジヤム 共計世

△ 編成

第一隊 福田 川口 池田 佐伯  
 第二隊 林 岡谷 下石坂 京都  
 第三隊 林 米野 岩崎 京田 木下

△ 食糧

米 一斗五升 以化米四五升 コツペパン一〇二個 即席餅三八  
 鶏(ニ斗弱) ビスケット六〇〇枚  
 野菜三袋 コンドーフ、ベーコン パター ジヤム 共計世

△ 裝備

| 器具名                 | 総数 | 内分一隊 | 二隊 | 三隊      |
|---------------------|----|------|----|---------|
| NOS ナイロンワンパー(4人)    | 1  |      |    |         |
| N04 ワンパー(4人)        | 1  |      |    |         |
| N03 ウォール製用スー        | 1  |      |    | (1)     |
| エアマツトレス             | 8  | 3    | 3  | 2       |
| シート                 | 2  |      |    |         |
| ズコックス大型             | 3  |      |    |         |
| ラジウス(含属品含)          | 2  |      |    |         |
| パナール                | 2  |      |    |         |
| テルモス                | 1  |      |    |         |
| サイル 四斗水             | 2  |      |    |         |
| ガイル 三斗水             | 1  |      |    |         |
| ハーケン                | 15 |      |    |         |
| ハンマー                | 3  |      |    |         |
| カラヒナ                | 8  |      | 8  |         |
| コソフエ                | 2  |      |    |         |
| 大鏡                  | 2  |      |    | 2       |
| 温度計                 | 2  |      |    | (1)     |
| 鏡                   | 3  |      |    |         |
| その他炊事用具などの小物        |    |      |    |         |
| 鍋                   | 17 |      |    |         |
| 鍋                   | 10 |      |    |         |
| 鍋                   | 5  |      |    |         |
| 燃料                  |    |      |    |         |
| 石油 ニガロン アルコールニ〇〇〇CC |    |      |    | ポイズン三〇個 |
| 日ソク                 | 60 |      |    |         |

### △ 行動報告

三月二十七日 (映 晴)

新宿(0635)——堀山(0730)——バス三區(1100)——  
広瀬(1405)——BH(1500)——東沢渡歩(1550)  
——BH(1715)

林・南谷・下石坂・佐伯の四名 先達現役多数の送迎を受けて出発  
荷物(平均八貫。堀山より五十分をガタ／＼とゆられて三區へ着く。

天気は良く初夏の様である。雪など何處にも見当らず。冬の装備を背  
負っている我々にとっては全く気が重くない。途中雪取——雁坂峠走  
のパーティに会い雪壁をぬくと平均二尺位だともう。広瀬に入りトサ  
カ尾根のザンザンなシルエットが見え出すとやはり我々の斗志はかき  
立てられる。BH(前沢小屋——日原氏宅)には日原氏は留守で橋が入  
っている。一休後林・下石坂は渡歩の調査へ。南谷 佐伯はBHの  
整備。

渡歩は水量がいつもより少いので大きな石を礎石を作るだけで事は  
すんだ。我々にとって最大のニガテであるラジウスはテスト良好。

〔三月二十八日〕

○先発隊林以下四名 (高嶺后小屋)

BH(0635)——小岩場(1145)——大岩場(1155)——  
四三五)——AC(1510)

出発の際「東沢へ自殺のため入っているものが居るから先見炊才連絡と  
たのむ」と云はれ一寸嫌な気持ちに、まられる。目前にそびえる難題の岩

峰は我々に拍車をかける。サツクが大きく渡歩奥へのツブコギはなかなか  
のアルバイトだ。白布を頼りに無事渡歩奥へ下降する。渡歩は前日の  
偵察で容易に通過。トサカ谷の朽ちた橋を渡ればいよいよ本格的な登り  
で汗が吹き出して来る。平均四〇度位の傾斜とそれに倒木が行手を堅し  
キスリクをひっかけた苦勞する。例年の経験から一四〇〇米附近より

相当量の雪を予想していたが一向雪が出現する気配はなくカンカンに叩  
てついた氷と土と石植花のフツシユが果しなく上部へ続くばかりであ  
る。急傾斜なので高度はぐん／＼上るが荷は重くフツシユのためルート  
アインテックスは困難となり岩小屋をすぎ、ようやく現れた雪に足をと  
られる傾小岩場に着いた。岩がもろく荷が大きいので慎重に斜状バンド  
より上に出る。大岩場下に示ホし、まずV型の凍結したガリーをつめ死  
へ五米程トラバース。この上四五米が崖でスラフをなし、や、困難で  
ある。東沢側バンド手前より四〇米一本をフツクススリガリーまでた  
す。ハーケン三本使用。デポに引き返しサツクを背負い慎重に登る。フ  
ツクスの上部は雪の付いているバンド(一尺中)をトラバースすれば

後はホールド・スタンス共に豊富な階段上の登りで大テラスである。な  
ほも二米程がきざり石植花の懸崖地帯へとびこみホツとする。下を見下  
すと直下に東沢が白く立立ちBHが遠く見える。岩が終って一息入れた  
のも束の間倒木とラツセルに苦しめられる。悪戦苦闘の末才六峰との中  
間のや、傾斜の落ちた地帯にACを建設する。ラジウス将調なる為夕食  
もスムーズに出来る。心配していた雨が降り出しテントの居住性は悪く  
少々くさる。気温マイナス三度一八時

○後発隊 福田宏二郎 川口 池田 京田



嵐山(〇九三〇)——三器(一一〇五)——BH(一四五〇)

満員のバスに積み込んで特大のキスリンが乗客の白眼視に会い、困った。ようやく開放され馴み馴れを脱れ、BHに向う。BHより見るとサカ尾根は下半身をガスでつゝみ直直にせり立って山水画の如き美観を以てし、山の神秘的な威圧感を我々に抱かしめる。先登の連絡用紙により歩歩の心配なきを知る。折から降り出した雨に明日が心配だ

〔三月二九日〕(晴后白雪) AC六時マイナス三度C

〇 三峰フィックス工作 関谷 佐伯

ACより上は倒木群で二十米おきにナタメを打つ。その辺り主稜と側稜の判別が非常に困難でガスが出れば八十パーセントルートと失する恐れがある。P6は岩峰の基部を右側にトラバースし、花手の凍つたガリーを五米ばかり直上。花手のバンドを更に左にトラバースし、石積花をつかんで懸く頂上に立つ。雪をまじ之を横なぐりの強風にあらわしながら6のゴルへ下る。P4は軽い。こゝまではアレートを成し、秩父にはめずらしアルペンの凡庸である。凡雪はまずく、強く国師はほうつとして判然と見えない。ヤッケを着用したが寒気はまぎびしい。P3下でカットポレアンカイレン。関谷トツパで登攀開始。中段テラスより下へハーゲン四本にて三〇米カイ一本をフィックスする。工作中も強風にあらられて苦勞する。東、稜樹の高度感にすばらしく、大岩場の崖に樹木がないので派ヒヤンタルムを連想して見たりしたが背後はやはり秩父の原生林である。P6で小休の後森林帯をラッセルを追ってACに馳下った。

〇 遊ボツカ 林 下石坂

雪が完全にクラストしているためピプラム底の林、二度程スリッパしたが大争に至らず大岩場はフィックスで快適に下る。小岩場下で支稜に突込んで南向をロス、森林帯の中でも凡強く雪がとどろ。笛吹川は昨日の雨で急激に増水。ヒザ上の歩歩が終ったとどろに後登と会う。

〇 後登 福田以下三名

ACに向う。各自八時 前夜の雨もすつかり上りトサカ尾根が力強いスカイラインを画している。

BH(〇七五〇)——渡渉(〇九〇〇)——大岩場(一二五五)——四〇五——AC(一四四〇)

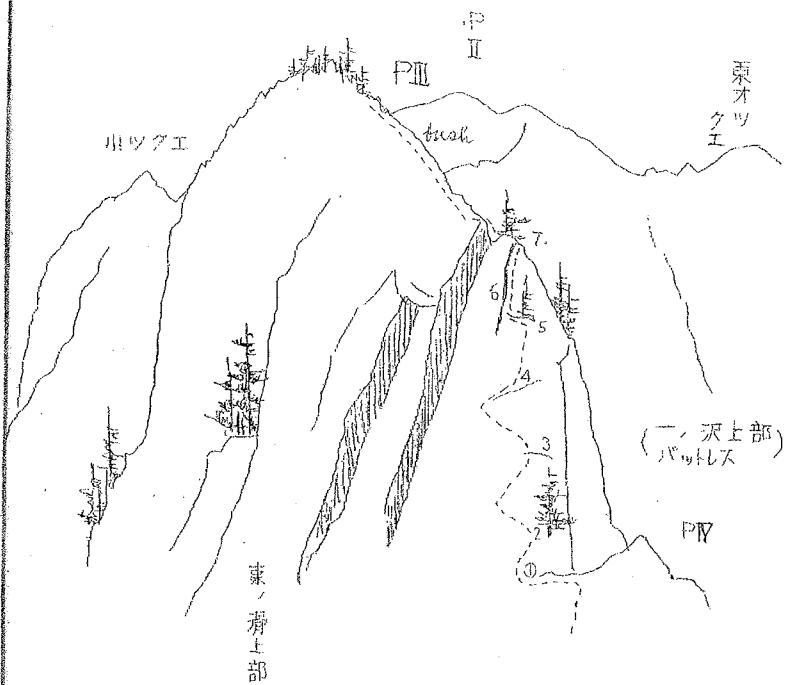
渡渉は増水でヒサ上まで対岸に上つても足の感覚はない程冷い。せろせろの現れ出した雪は行動に影響はないにしても倒木と支稜には全くアゴを出してしまふ。花手にはP6より派生する支稜が主稜より高く大きく見之谷で断ち切った如く東沢本流に切落ちている。明るい地處で才一回の昼食を取る。小岩場の要所くは雪ばかりが薄氷が付き、ピプラム党の面々嫌な顔で登る。大岩場下で糧を入れて才二の昼食。ヤ、もすればずり落ちどうな急雪面が強風に吹かれてガタ／＼ふる之ながらパンをくらいついてはいる様は悪人にも見せられぬ。大岩場のルートは夏期空身なら何でもない所だが、重荷と無難に付着している氷柱とヴェルクラ状の雪が身さびきしめる。絶河高度約五十米位か。所々に樹木があり花程高度感に感じられぬ。岩も小岩場にくらべ堅い。ガリーの芯は雪が凍つていて手強いがフィックスはすけられて登る。ガリーの上部や、ハンタ気味で背の低い者はぶるぶるの様に上へ出る。京田ガリー上のス

ラスでスリツアしたのがフィックスきつかんばまゝ滑落、途中のピンでス  
 トツア事無きを得た。大岩場の上に出るとホツとする。雪は意に尋くは  
 リヒサまでグラストを破つてポコ／＼落込む。A.C.にはフィックス隊が  
 既に帰つていて共にA.C.を補強する。気遣はク／＼下リ凡ゆる岩場が  
 凍つてしまふ。靴もコ／＼になつてしまふ。ラジウス不調。

(三月三日)

(快晴無風)六師マイナス〇度

オー隊A.C.(〇七五〇)——P6(〇八五〇)——P1(一一二〇)



### P III ルート

- 1 取付点
- 2 テラス
- 4 斜バンド
- 5 小テラス
- 6 クラック
- 7 2.30m fixed Rope

(一一三五)——喜望(一六一〇)

第一隊口(福田、川口、池田、佐伯)林以下の支授と受けてA.C.出発。  
 P6への登りにかゝるが荷が半減されてるので簡単に頂に立つ。P3  
 が正副にホツクエ、東、オツクエを引っさけて成足的に、背後に圓頭岳  
 と金峰山が丸い山頂を純白の装に身ざらしている。雁返峰もすぐ近く  
 に見える。P5、P4も軽く越し、P3直下で小休、時間短縮のためア  
 ンカイレンせず直ちに連続行動にうつる。このフェースは雪の付着があ  
 った場所も見念された前であるが、雪少のためか雪も殆んど付着せず、  
 氷柱もなく幸が不幸か高度感になやまされたのみで登攀を終了すること  
 が出来た。がやはり全計画中最大のヤマはこのフェースだった。P3よ  
 リP1まではピークのトツツのみ岩で各輪郭は針葉樹林帯を成し雪は深  
 く股までのラツセルである。P1で二隊にサポートされた養料を受けと  
 り再び各自八箇条となる。愈々増した野エトツツを交代しつゝ前進する  
 がロツチはなかくはかどらぬ。『ファイト』『ガンバレ』の怒号が  
 山にこだまする。心臓の鼓動は高く耳にひびき汗は流れて目にしみるが  
 拭つひまもなく、たゞ山が我々前に与える苦しみに全力を以つて斗う。  
 所々に現れる岩の凸部のためにワカンが着けられぬ。二一八〇ピーク  
 き越える頃から稜線がひろくなり出現して来た石箱花ジャンタルにホ  
 ルやヒツケルをひっかけ腰までのラツセルに、そして又困難なルートフ  
 インポイントに木賊を目前に目次となり急いで登攀する。

○ 第二隊(林、関谷、下石坂、京田)

P1で一隊を送り出しP3のフィックスを撤収アムカイレンで下降。P6  
 で夕陽をあびる圓頭岳にアテューを送つてA.C.に下る。今朝不調でよわつ

たラジウスが快調。二隊の任務も終つたので明日の大岩場下降のつらさも忘れて全勇休憩する。

〔三月三十一日〕(曇) ACCマイナス5度

〇一隊

あと一息で巖冠尾根を突破出来ると思うと猛然とフアイトが湧いて来た。まだかたくしまつてゐる雪の上を快直にピツチを上げる。ハツクの重さにも馴れ入試地獄も忘れ今まで程苦しくなれ。すでに木賊山の最後の登りにかゝつて、足の上へと足を上げる。金峰が純白の雪を口師の石に現し一同歓喜する。ワカンを着けやゝもすると方角を間違へそうになるだゞつない尾根をルートを示す偵察の肺の赤ゼレを求めて北へ北へと進走。やがて傾斜はなくなつたが縦走路は現れず、小隊の三年に比してホリウムのある超弩級型の一年の池田、佐伯がクラストを破つて足をとられ苦闘を演ずる。兵禱と白襟の疎林をぬけて遂に主脈にとび出す。「丸弁通り成切」とハツクを投出して全員の前は安緒の色かくせず、「キンキジャクヤク」そのもの。我々は縦走隊が主脈へ出さずれば、万一の事故なき場合、当初より「丸弁通りの成切」を確信してその全力をトサカ尾根にかけていた。縦走路の有難さ、いや路の有難さに感泣する。正面に金峰、甲武信、遠く真白に八岳、駒アが一望のもとにあざめられ、それらの過去の雪山の想出がチラツと脳裏をかすめる。アツと云う間に甲武信小屋へかけ下り、一票の望みを托して池田、佐伯が夏の水場之行つて見たが、今時生水などあろう筈がない。小屋は最近入つた着があるときみえて足跡が雪上に臭々としてゐる。薪が豊富に用意されてゐる

ので燃料に心配な我々は不本意ながら此所に一時し明日は是非でも大池まで突破することにした。豊富で薪には小屋番の人に心から感謝して使用させてもらう。

〇二隊

ACC撤収(〇八二五)——大岩場(〇八三二)——(一〇〇〇)——岩小屋(一〇二五)——トサカ谷出合(一一三〇)——BH撤収(一一〇〇)——(一六〇五)——三雷(一八四〇)

雪がカチカチに凍りついてゐるので慎重に下る。大岩場はつらゝがつかいて登りより赤づかしい。一人基部まで下りハツクを置いてフイツクスを撤収アフサイレンで下降。小岩場も無事下り岩小屋の下で樵夫に半強制的にトサカ谷へ下らせられるが、今の樵夫の踏跡があるだけの驚くべき急斜面を苦心してトサカ谷本流へ下る。尾根の下部の原生林も枝成の手が入れ始められ、いつ木枝が落ちて来るかわからずヒヤ／＼しながら対岸の軌道に出る。時間が早いのでBHもついでに整理撤収。ナメラ沢の河原でおとすれた春を楽しみながら今日帰る関谷。下石坂と別れのコンパと行いトサカの尾根を振り返りながら三雷へ下つた。関谷、下石坂は帰京。林、京田は三隊と合流すべく基嶺へ向う。

〇三隊(米野、岩崎、木下)二隊の報告を受けて出発。

〔四月一日〕(晴后くもり后雪)

〇一隊

甲武信小屋(〇七一五)——富士見(〇九三〇)——口師岳(一六〇〇)——大池小屋(一七〇〇)

甲武信岳までは快通。頂上から口師岳をながめてその山容の馬鹿示力いのにウンサリする。縦走路は二三日前の縦走者（後に都立青山高校山岳部であることが判った）のトレールがありピッチも上ったが、午市からは雪がくさって腰までぐりぐりに炬する。しかし何と云つても天下の主脈縦走路だ。雪季と云えども雪登りピッチが出る。口師岳を登り切り東の方、トサカ尾根を見下すと主峰から派生してゐる支稜に岩峰羅がさざざられてゐるが、坂中からぞして東天から仰ぎ見る様は「神の谷を以つて断ち切つたる」と田辺重治氏をして書かしのたゞこの神秘的な凄惨さは何処にも見当らず、あまりにも女性的な容姿に悲愴する。周囲の山々は黒雲のウェールにつまれば冷いものを感ずる。早々に頂上を降り、大池小屋へ下る。小屋の中は汚れっぱなしで不快を感じ慕當とまめた。夜半より雪となりナイロンテントにサラ／＼と快い音を立て、降りしきる。

〇 三 隊

塩川（〇九二三）——金山（一四四五）——金山峠（一六一五）——

幕営（一六四〇）

七貴もあるつかと冠れる馬鹿化したキスリンタを背負つてあよみ興味の無い道と金山へと急ぐとむなく歩く。牧歌的な水車のみゞきすら我々にとっては動物的な悲鳴に聞える。しかし我々が光源儀にもなせらるべき草原と白樺の金山に着き金峰とそれとめぐる岩肌山々を見参するや自然と新しいファイトが出て来た。金山峠を越して白樺林の中にテントを張る。

（四月二日）（雪后雨前晴）

〇 一 隊

幕営地（一五〇〇）——朝日岳（一七三〇）幕営

いゝ気持で雪の音を聞いてゐる内に、いつのまにかみぞれとなり雨だ。強度計は一向未定下に下つてくれない。雨ではさすがの重戦ナイロンテントも無能である。浸水のためシユラフがぬれて居住性が悪いが、連日の行動なので休養帶と決し腰を落ちつける。皆不景気な顔だ。午市二時頃に至り雨が上るや行動開始と覚気縮合、また／＼と向に縦收パツキンをする。あわてゝ昼食をほおはり雨で腐つた雪をわかんで踏みしめ、大分軽くなつた荷を背負ひ朝日岳へと進む。目と鼻の先に金峰山と望み、明日の希望に胸をふくらませ朝日岳頂上に希望の山頂幕営を行ふ。夕刻になつて一段と強く激しくなつた風と満天降る如き星に明日の晴天は約束された。直してもさわりでも明日は金峰を越えて下界だ、風がテントをたゞき外では雪が瓦にさら／＼とたわむれてゐる。

〇 三 隊

幕営地（〇七五〇）——富士見平（〇八四五）——（〇九〇〇）——大日

小屋（一〇五〇）

雨の中を出発、直ちに直ちに急な里宮の登りにかゝる。重い荷故に苦しさもひとしおである。雨も大分激しくなり富士見平でのひと休みも体が冷えるだけであつた。早々に出発八ッ岳が雨の中に白く煙つて見える。雪はせいぜい五寸位、一尺位、土が出て居る。やはり今年も雪が例年よりすつと少いのだ。やゝもすれば、あまりにも呆気なく突破したトサカ尾根に対して我々の過大評價ではないだろうかとする心を、雪少年と云

春山各隊行動表

|   |    | 三<br>番 | B<br>H | 大<br>岩<br>場 | A<br>C | P<br>3 | P<br>1 | 木<br>賊 | 甲<br>武<br>信 | 西<br>師 | 朝<br>日 | 金<br>峰 | 大<br>日 | 金<br>山 |
|---|----|--------|--------|-------------|--------|--------|--------|--------|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 3 | 27 |        | (2)    |             |        |        |        |        |             |        |        |        |        | 曇后雨    |
|   | 28 |        | (1)    |             |        |        |        |        |             |        |        |        |        | 曇后雨    |
|   | 29 |        |        |             |        |        |        |        |             |        |        |        |        | 晴后月曇   |
|   | 30 |        |        |             |        |        |        |        |             |        |        |        |        | 快晴     |
|   | 31 |        |        |             |        |        |        |        |             |        |        |        |        | 高曇     |
| 4 | 1  |        | 曇后雪    |             |        |        |        |        |             |        |        |        |        | (3)    |
|   | 2  |        | 雪后晴    |             |        |        |        |        |             |        |        |        |        |        |
|   | 3  |        | 快晴     |             |        |        |        |        |             |        |        |        |        |        |
|   | 4  |        | 晴      |             |        |        |        |        |             |        |        |        |        |        |

うことが打消してくれる。やはり我々はトサカ尾根をもっと正しく評価した。そしてもつと「悪条件の晴でも完遂する自信はある。又自信を持つべく努力して来た。一隊の連中もどう思っているに違いない。雨で雪が凍リスキー靴ではステン／＼の連続だ。米野スリッパも右ヒジに百傷したが大事はない。大日小屋は日陰のせいか一米位の雪だ。破壊甚しく屋根を修理し中へ夏テンを張る。明日縦走隊が到着しなければ朝日までテントを上げる予定。

〔四月三日〕 (快晴) マイナス七度

〇一隊

朝日岳(7000)——金峰山(8000)——大日小屋(1300)

パリパリにウイントクラストした稜線上にアイゼンのツアツケを立てながら金峰山へ向つ。何しろ先行者のラッセルやトレールも消え失は新雪の上を我々のツアツケスフールを残して行くのが無性にうれしい。登山を振切ると一面純白の金峰の雪原だ。今まで森林帯を歩きつづけて来た我々には全く秩父的な感じよりも、昨年の南アルプスの印象を呼びさましてくれた。輻射される春の陽光は我々の目を射、そして我々の肌をじりじりと焼いた。サンタラスもかけず目をさしよほつがせながら山頂に立つた。長年の宿望を達したのだ。今になれば暖冬裏変で積雪量の少いのが物足りない。しかし例え雪量がいかに多くとも我々は確實に目的を果して置らう。このトサカ尾根と甲武信以西の縦走を我々として美事成功せしめたのは、数年前からの緻密な計画と旺盛な研究欲、そして強いメンバースピリットに結びつけられたカメラマンの支援によるものである。

五丈岩の裏からかすかなエールが面える。五丈岩の上から佐伯、池田の若衆が「イヤッ——」と轟轟と張り上げて応答する。今年は何等の舞台だ。とうやら三隊が来たらしい。木下、京田、岩崎、米野、林の順に登つて来る。一人一人握手を交す。「お目出どう」「御苦労ね」。

一團向にわたつて岩と雪と取組んでいた我々にとつて今多岐隊の蹊い顔で迎えられることは、今迄緊張していた神経がゆるみ、何かのショックでも過ぎ出したような感激におどろいた。残留部員からの豪勢なおみやげが封を切られ、そして三隊の持参した新鮮な透明の水が何よりも有難かつた。南面でタリセードを充分楽しんで後、下降にかゝる。アイゼンが快適にきく内に大日小屋に着いた。水場上部のアイスフォールでステツパ切りの練習する。夕食はカレーライス、一團向振りの口にする米の味は格別だった。

○ 三 隊

大日小屋(〇七三〇)——金峰山(〇九三〇)——一〇五

〔四月四日〕 (晴)

大日小屋(〇八二〇)——富士見平(〇九一五)——金山峠介岐(〇九四

〇)(〇九五〇)——釜山(一〇一五)——一五〇)——落合(一一二〇

——増留(一一三〇)——堀川(一四二〇)——一五二五)——韭崎

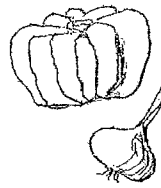
雪がカチンカチンなので一応アイセソで下る。気がゆるんだのか一隊の陣営心なしかビッコをひいて居る。雪急激に少くなり富士見ではもう認められない。此所でミズガキへ行くと云うハイカー五人に会う。雪が少いとは云え、もうハイカーの入山する季節だと云うことがピンと来な

い。金山の草原に畑ころぶと急にもう初夏なんだと云うことが春を一足とびにして身近く感ぜられ、今年の「春山」にも別れを告げ頭秩父の山を振り返りながら垣々とした道を暖かな春陽と土の香を身に感じながら堀川へと山を去つた。

(林、福田 記)

◆ 食糧整理報告

京田 守 弘



今度の食糧計画は大体成功であった。それ以来軍のレーション制の採用が成功したと云う事である。特に春山の如き当部にとつては横置期の行動の敏捷性が要求される大きな山行ではこの方法が必ずである。このレーション採用の結果を反省して見ると

- 食事の準備が敏捷化した。
  - 食糧の過不足反及び込みがなかった。
  - 出発前に食糧の過不足が査検しやすし。
  - パッキングに留意すれば無駄に便である。
  - 行動予定が変更になつても処理しやすい。
- 等々である。

〔パッキング〕 (包装)

バックには三〇×二〇×一〇のボール箱を用いた。内容の分類は概朝・昼の組合せで詰めて、バックを開くのが晚一面ですぐに取れた。ボール箱がつかれ、又はバックのヒモが切れたりゆるんだりしてはいたものがあつたので、これは主に内容物が重なることに起因しているので普

通の紙の箱ではとても耐えられない。出発前バックする時には品目に過  
剰不足ないか注意が必要である。

〔主食〕

1 米を主食として用う場合に最も注意せねばならぬことは炊事に時間がか  
かる事、熱量を多量に必要とすること、特に雪山では薪が使用出来ぬ  
ため携行する燃料が多くなることも考へねばならない。そこで米は原則  
的に晩飯に用ひ、小屋泊りの場合のみ朝も米食とした。一食一当り一合  
五勺とした。出発前によくふるうか、といっておくことも必要である。

2 アルファ米

原則として行動日、特に疲労のはげしいと思れる朝、晩に使用した。水  
を加えるが湯を加えるだけで飯が簡単に出来るが、如王漬が一キロ八十円  
で高価なため今回はオニ隊のみ三升(オニシ食品林)だけ使用してみた  
。パツキンは湿度に注意して詰めた。

3 パン

パンはそのまゝすぐ食せるので主として昼食に用い、副食もいろいろと  
考へた。パンの欠点は大変かさばること、このためパツキントに工夫し  
たが、山では全てその形がなかつた。乾燥して不味くなることであるが  
最初ゴツペで四日もつゝもりであつたが一週間向うまく喰へた。乾燥を  
防ぐ爲には包装も大事であるが出発前にバターをぬることも良い。同時  
にパンにベーコンをはさんだ。食事の時水がないと食べにくい各人  
パンに対する心がけ一つで、美味いと思へば唾液を分泌するものらしい  
。練習と経験が必事である。この場合レーズンがあれば最も良い様であ  
る。一食の一人当りはゴツペ二つ又はフランスパン三ヶヒした。

4 カンパン

一隊のみ昼食用として用いた他は予備にまわした。従来より使用してい  
たものと小指の先位のゼンナンと擦するものと二種使用した。バターと  
の併用は評判が良かった。

5 即席餅

これも以米と同じく熱を加える要はなく雪をとかしただけですぐ練つて  
食べられるし値段も高くない。主として朝と予備に用いた。砂糖とキナ  
コで喰うのが一番うまい様である。これには独特の臭いがあり、食欲に  
悪影響を及ぼすキナコではそれ程感じないので食せるからである。糞意に  
して食べる時は前後中に練つておき一晩寒気にさらしておかぬと汁の中  
でとけてしまう。毛子と汁を別に作り食す直前に入れ、は丁度具合を良  
い。一食の量は四人で一箱(五合入)を米の場合より少々少い。キナコ  
では少いと考へるが、糞意では例のほいと水腹のたぬが余る位であつ  
た。

要するに副食と調味料如何では優秀な食品であると云える。

〔副食及献立〕

米・パン・餅と分類して、なるべく変化もあり、食欲も出、多くの人の  
好みに合う様につとめた。献立はA B C …と一定のものを作り直當に  
組合せた。

- 1 米
- A めざし
- B さんま干物・バター
- C 味噌汁
- D コンビーフ・玉ねぎ・バター
- E 煮物(切干大根 油揚 醬油 じゃがいも)
- F カレー(馬肉いしよ、バター 玉ねぎ)

2 餅

- A 醬油 砂糖 C キナコ 砂糖
- B コンビーフ D 雜煮(バター 玉ねぎ 味噌)
- 3 パン及カンパン
- A ジヤム・バター D ベーコン・バター
- B 乾アドウ・チーズ E ジヤム・ベーコン
- C 乾アドウ・ベーコン

以上でわかる様に、カロリーを多く取る爲に脂肪が必要であるが、最初生肉を使つ予定であつたが、備蓄恐れがあり、運搬も不便であり、全部マーカリーに切替へた。マーカリーは價の安いのが利点であるが、少量に使つことで少し油が多すぎて食器の増未に困つた。量は全日程でもポンド使用した。

〔調味料及嗜好品〕

春山として特に変わったものはない。

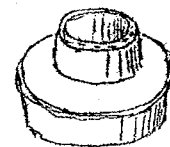
〔予備食〕

各隊三日分を用意し、五食分を即席モチ、四食分をカンパンとした。予備食は最後まで使用しなかつた。即席モチは總体的に力々の割に重いものである。箱が少し弱すぎる。

尚食糧計画の全体の重量は四十六貫であつた。それから食料 燃料は別の人が持たぬ限り、特に石油の重量があるため、奥が付着して食らぬなくなるので絶体にさげねばならぬ。

△ 燃料報告

佐伯岩夫



1 計画

- 一隊 石油2ガロン アルコール1と メタ15ヶ
- ローソク30本
- 三三隊 アルコール1と メタ15ヶ ローソク30本

燃料の唯一の問題は我々の所有してけるラジウスの(口産)調子の非常に不安定のことであつた。しかし費用の奥で石油が一番好適であつて緊縮予算をやりくりせねばならぬ我々には、どうしてもこれがなければならなかつた。そこで今迄に一月武蔵岳、二月川苔嶺訓練道に之れを使つた時は、(いづれも調子が悪かつたので今度は何度も製造元の杉本に足さ運んで一部改善してもらい使用法にも万全を期した。出校で實際に幾度も試験して見たが非常に快直な調子であつた。それで一応これ信頼することにして尚予備としてアルコール(バーナー用)メタ数ヶを持つて行く事にした。秩父であるので最悪の場合は、石油を使つて焚火を作ることも考慮した。

2 結果

先發隊がラジウスを持つて出発。ベース、C1で使用。(いづれも快調、まずこれで大丈夫と思つた途端、C1二日目本隊を迎へた日に気温が下ると共に急に駄目になつてしまふ。結局先發隊はラジウスを才二隊に残して二隊用のを含めてニリットルのアルコール、メタニヶを持つて出発した。甲武信小屋で薪を集めて使つてアルコールを節約、之れを朝日岳のラストキヤンプまで持たせた。朝日では灰日に大目まで下ることが明白となつて石油以外の全燃料を使い果す。二隊はC1で盛大なたき火



さしてラジウス不調をカバーし、なくて無事に一応終った。

3 反省

結局ラジウスに対して未熟な我々の技術からか又はラジウス自身の出来が悪いかで遂に使用できなかった。実に残念であつた。今後これについてもっと研究すると共に一般に他の冬山用の安全な費用のかゝらぬ燃料について我々は再検討の要があることを認める。

カン入りの氷イソンはテント内で肉切つて使つと非常に目にしみ鼻水痛くなつて苦しかつた。又この燃料は非常に高価であると思れる。アルコールバーナーは火力も強く絶対には調子の悪いこともなく仲々よい燃料ではないか。費用は幾分高くつくが、あてにならぬラジウスを使う位ならこの方が安くつくのではないだろうか。ローソクは別に何題なかつた。ランタンは持つて行くべきであつた。

以上、係が一年の新人であつたので不備な点が非常に多かつた。

部報 寄贈 御札

- 都立立川高山岳部殿 「部報」オ一六号
- 〃 新倉高山岳部殿 「部報」オ一〇号
- 〃 五商山岳部殿 「ベルグハイル」オ八号
- 〃 江北高山岳部殿 「部報」オ七号
- 〃 富士高山岳部殿 「やまなみ」オ二号
- 麻布学園山岳部殿 「岩燕」
- 緑山岳会殿 「登攀」オ八五九一〇号

○ 後記

昨年の九月リーター交代に當つて二年部員の弱体が大問題となり、又二年部員が春山と修学旅行と日程が重つてしまつたため、三年部員の入試後の参加が必須となつた。このため積雪期と云つても厳密に云えば輿秩父は残雪期に入る四月に行動がかかる。特に今年は稀に見る少雪にみまわれ、就中気象条件があまりにも良かった事だ。良いからと云つて不平さ云ふのではないが、成功してしまつてから見ると最初の意気込みが大きかつたせいが、なんとなく気抜けしたようではない。

天候には終始恵まれ、その上雪が、あまりにも意外に少かつた。大岩場には三峠にしろ、殆んど無雪期と異る争のなリテクニクで登り感すことが出来た。しかし雪が少かつたとは云え木賊山の登りには泳ぐ様なラッセルが強いられた。全行程が例年ならばこの様であつたかも知れないが、そして我々は雪山のさびしさを充分味わうことが出来た。いや場合によっては敗退したかも知れない、月が一敗北として我々の全力を盡すことが、我々の力の限界を知ることが出来た筈だ。この点から見て今度の春山は我々が期待してはいた成果をもたらさなかつた様だ。反面大人故によるスムーズな行動、隊員間の暖ま友情等西高山岳部が誇る美点と遺憾なく發揮し攻勢隊の斗志、支援隊のネバリが早業マツチして今度の成果をもたらしたのだ。せう考之れば反つて雪の量も云々する必要はないのではないか。正部員会では、このメンバーシップを当時は去年度の春山も恐れる必要はないとの喜びの感を抱いた。

細目にわたる検討を行へば、先づ気がつくことは燃料の点だ。係さ云

々する必要はない。彼の絶大な努力は全員の認める所であろう。ラジュースは全く使いものにならなかつた。殆んど全てバーナーを使用した。しかしアルコールは殆んどその全量を経走最終日に使い果してした。若しも予定を上まゐる滑山日数であつたら最初に乗信号を出すのは燃料だつたらう。今まで我々の実験で我々のラジュースが快適に使いこなせな山行が一つとしてあつたらうか、新しし燃料係はこのことを腹に命じ今度のラジュース研究に直ちにいられたし。

しかしこの燃料の不備をカバーし、その行動を円滑ならしめた食糧計画は見事だつた。その主食を全て小麦粉に頼つたことも、この成功の鍵があつたのだつたが今後の雪山にも小麦粉を多量に活用する価値があると信ずる。

又複雑であつた指揮系統も見事に統一されていたのも縦走隊と支援隊が感謝の気持ちでつながつていたのも強いメンバーシップのためであろう

以上 稲田 宏 二郎

### 都立西高山岳部史

せの二

中川さんが前号に於いて一九四六〜九年、一九五〇〜現在とに部史を大別され後者としてスポーツアルピニズムの部としたが實際上明確にその区切を画すのさ五〇年度にあくこと不可能ではあるまいか、と云うのは、確かに新しい部への躍光が射し始めたことは否めない事象であるが部自体が旅行部的形式から抜け出したとは考へられず、部員のうちの一派それも極めて少数の部員(田中將、森沢等)の小さな部員であつた

### 合 宿 田 共 岡

① 春山合宿のときのこと。縦走隊を迎えて麓の上等のカリーまで上つたYさん。自分ながらそのからさにたまりかぬ水筒に入れてある醬油をも忘れ水と悪いコクリ／＼。

② 今年の夏山合宿のときのこと。がき道では他人に決してひけをとらぬと云うM。槍沢の下りで何やら紙にツ／＼んだ白粉末を発見、縦走も最後近くなればがき道華かき極め、他の部員に見つかつてはうるさいとあわて、口へ投込んだ。これを見つけた二回「舌酸カリ」だとさわぎ立て、水さのよせたりはかせたり、夕暮の槍沢ではははは六さわきとなる。がき道をほこる騎士諸君、今度、水筒と紙づつみは万々気を付けられい。(X Y Z)

(一九五〇「五三」)

のだし、決してこの年に一八〇度転じたとは考へられないと云えようだからである。或る意味で田中將利等は終戦後の混乱期の止まざる得ぬ諸事件時代にあつた部形式に固執マンネリズムに落入つていた当時の部全体を激しく動揺させたことは確かであつた。しがも社会状態の転換と共に良き指導者もなく今までの幼稚な形式のまゝで更にそれまで考へられもならない旅な大きな山行舞台へ飛躍しようとする当時の二三部員にとつて

は七めんどくさい目の上のタンゴス的存在であつたのである。その当時の山岳旅行部の性格でしかも栗内書(トラの巻)片手に大きな山行に胸をふくらませていた大多数の部員にとつて最早それまでの旅に十二月(三月と冬眠です)すとは考へられぬ段階に達しては、しかるにその反面山に対する態度は一步も出るところなく、將利等の主張する山とのフエアの研究とか、準備だとか、それに伴つて護磨なんかは、余計な苦しみにすぎないと思はれた。要は山を茶しむので苦しみに行くのでないといふやうな觀念に固執し固まっていた。向題は、この樂しむとか苦しむとか、ワンケルだとかアルパインだとかの前にあつた。如何なるスポーツに云へども樂しいと思ふこととその流れを成している。將利等の云うのはオ一に山行を如何に合理的に安全に味をかに對する主張であつたのである。大半の部員にとつては彼等の山行が如何に不安定極まるものであつたにせよそれを自ら見出し得ぬ程幼稚であつたが故に「安全に」と云う言葉が余計の付いたの如く感じられ訓練だともつての他と考へていた。しかも部のシステムがその様であつたが故に、山行三十回のもつても、山行廻り三三回のもつてもその発言に同等の重きを置いていたのである。

それ山行のリーダーの資格もあいまいであつたため、リーダーたるべき人格と技術を有せぬ部員が平然とリーダーの位置に君りんし、しかも無責任極まる山行を平然と行つていた。オニに將利の主張したの部員の存在意義である。

これらの二つの向題を中心とする両派の激烈な斗争と、山行の合理化と部團結を主張するアルパイン派の圧倒的勝利が一九五〇年三月五三年の厂史の主流であらうと考へる。

では何故にかような論争が二年間も成育をついやしたのか。先述した通りその当時のシステムにより山行の至驗、技術に關係なく各部員の意見に平等の重きを置き、その決定は全て多数決によつた。このためやれ検討会が必要だ、トレーニングが必要だ、重裝備の織走が必要だとする当部としては凡ゆる進歩的の試みは、部四十名中の大半を占める山行四五回の部員にとつてその必要を理解が出来ず脚下されてしまつた。山正が物をまう頃には又部員の代が代つてると云う具合に常々めぐりぐくり返されていたのである。

五年の夏、今井君の遭難以来、俄然それまでの俗長な論議に見切りをつけた將利等は皆、精神を棄てたかの様な態度に出た。九月彼のキ一フリーターとなるや反対意見をとり入れることなく、ワンマン的に部を引きつり出した。彼の語調はするどく協調を叫ぶるべき議論が対立を生んだ。この頃の山正は部の動搖の初期であるが、實際に部のゆれ動いたのは、彼が部を去つて後のことである。

この旅に部に初めて「どう云うことが眞に山とフエアの斗争なのか」が判然と理解される旅になり、しかも旧部制が新部制を認めさせたのは、一九五二年三月の春山によつてその年の教習員新人(林 福田 岡谷等)があの手痛い失敗と自然條件の厳しさを反省することにより一段と全部員がレベルアップされたからに他ならぬ。

これらの至退は次第にて詳述するつもりであるが、この失敗を見越しても尚失敗してより後の一二年の反省を期待した五一年度の春山こそ、理想実現への重大なエポックであつたのである。(以下次号)

▲ 昨年当りより興秩父、南ア、丹沢等に「都立西高OBカストリ山岳会なる春書と小屋、指原様に落書きしてあるとの同会世がおりますが当山岳部とは何ら關係は無いものであります。

1953年度山行総覧 4月～3月

- 1 川苔谷火打石谷下部 4月28日(晴) P林
- 2 川苔本谷百尋滝正面及桂谷 4月28～29日  
P 福田 関谷 田口 坂井
- 3 谷川岳マチガ澤 5月3日(晴) P川口
- 4 火打石谷下部 5月3日 P福田 米野
- 5 川苔山新人歓迎会(61) 5月10日  
P 篠崎先生 林(武) 関谷 川口 高橋(信) 米野 伊藤(弘) 岩崎  
山中 嶋山 坂井 宮上 下石坂 小林 池田 木下 京田  
井口 (部外三名)  
(OB) 林(春) 田中(将) 中野 森澤 平沢(勇) 計27名
- 6 母澤水干澤及源次郎澤 6月6～7日 (公休62回)  
P 中村(真)先生 林(L) 福田 関谷 米野 田口 坂井 下石坂  
池田 伊藤(耕) 木下 京田 佐伯 桓石  
(OB) 田中(将) 中野 笹田 平沢(勇) 坂井知彦部 中島氏
- 7 笛吹川東沢甲武信岳枡本 7月17～19日 P田口他五名
- 8 七石山 7月16～17日 P福田 岩崎
- 9 川苔山周辺 7月16～19日  
P 篠崎先生 林 関谷 福田 米野 山中 岩崎 伊藤(弘)  
千葉
- 10 雲取山 7月17～19日 P坂井他三名
- 11 甲武信岳雲取山縦走 7月18～21日 P下出他
- 12 富士山学校行事指導 7月27～28日 関谷 米野
- 13 北ア烏帽子岳槍ヶ岳縦走酒澤夏山合宿(公休63回)  
P 平山先生 林(CL) 福田 川口(SL) 以上正部員  
田口(SL 食糧) 下石坂(器具) 稻葉、山中 岩崎 池田 木下  
京田・高成 佐伯 桓石 (OB) 田中(実) 中野 笹田 計18名  
7月30日(晴后雷雨) 大町(1205) — 葛湯泉(1250～1320) — 不動  
滝(1525～1550) — 湯小屋(1550) — 幕営(1635)

7月31日 (晴后ガス) テント場(0810) — 狹棟(1210~1310) — 烏帽子野陣場幕営(1445)

8月1日 (晴后ガス風強し) テント場(0620) — 三岳(0755~0810) — 野口五郎岳(0925) — (1000) — 赤岳(1340~1415) — 鷲羽岳(1600) — 三俣蓮華幕営(1700)

8月2日 (晴 - 晴小雨) テント場(720) — 双六池(0930~0950) — 樅沢岳(1035~1100) — 肩(1600~1630) — 槍沢小屋(1825) — 一俣(1910) — 横尾(2020)幕営

8月3日 (晴) 横尾(1055) — 本谷橋(1155~1205) — 酒澤(1405)BC

8月4日 (曇后雨) クリセード訓練

8月5日 (快晴)

A 北尾根 8名 BC(0620) — 56コル(0715~0745) — 前穂(0950~1030) — 奥穂(1150~1205) — ジャンダルム(1250~1335) — 奥穂(1420) — 穂高小屋(1440~1455) — BC(1550)

B ジャンダルム 5名

C 稜線縦走 4名 BC — 南稜 — 北穂 — 穂高小屋 — BC

8月6日 (晴后雨)

A 北穂東稜々線縦走 6名

B ジャンダルム 5名

C 北穂南稜々線縦走 6名

8月7日 (晴后雨) BC撤収(0915) — 橋(1010~20) — 横尾(1100~1200) — 徳沢(1255)泊

8月8日 (快晴) 徳沢園(0700) — 白沢(0735~50) — 徳本峠(0925~1015) — 出合(1045) — 岩魚留(1130~1230) — 取入(1340~1410) — 島々宿(1540) — 島々(1625)

女子部員2名を含む合宿は今までにスキー合宿以外にはなかったので、色々な面で画期的であったが、新人の訓練も一応満足は出来たので、大局的には無事に合宿の目的を果し得た。ただ正部員がもう二三人参加して欲しかった。指導陣が手不足であった。

- 14 鷲冠尾根才二次偵察 8月19~21日 P川口(L) 岩崎 宮上 坂井 田中(OB)
- 15 甲武信岳 8月23~25日 P竹内(候)
- 16 ツバサ岩岩登録 9月13日 (公式才64回)  
P 米野(L) 奥谷 福田 岩崎 山中 龜山 佐伯 京田 篠崎先生 (OB) 田中(将)
- 17 砲高尾 10月4日 P宮上 下石坂
- 18 奥秩父主脈徒走秋山合宿 10月24日~28日 (公式65)  
P 林武志(L) 岡谷(SL) 山中冨佐子 岩崎元子 下石坂勝至 龜山純子 池田務 木下康彦  
京田守弘 高成俊介 (OB) 中野英司 田中將利 計12名  
10月24日(晴) 川上(850)——信州峠(1100~1145)——黒森(1245)——金山峠(1345) 幕営  
10月25日(晴后雪) 5時零分 出発<sup>07</sup>(0850)——富士見(0930)——大石岩(1000)——  
雁岩吹上末端(1035~1135)——金峰山(1325~1345)——朝日岳(1450)——大弛(1545)  
10月26日(曇時々薄日) 小屋(0815)——北奥千丈岳(0905~0915)——口師岳(0925)  
——富士見(1100~1150)——甲武信岳(1425)——甲武信小屋(1440) 朝6時-7℃  
(使察隊と合流出来ず)  
10月27日(快晴) AM6時-2℃ 小屋(0720)——東破瓦山(0905)——雁返峠(1005~1050)——水島山(1120)——笠取小屋(1250~1340)——將監小屋(1550)  
10月28日(雨) AM6時零分 小屋(0640)——一、瑞田辺義一氏宅(0800~0845)——大切峠(0930)——高橋(1000)——落合(1020)——大久保小屋(1200~1330)  
——丹波山(1500)——米川
- 19 田沢表尾根 (晴) 10月27日 P 宮上 田所 佐伯 室井
- 20 鷲冠才三次偵察 10月25~28日 P 福田 米野
- 21 乾徳山 10月 日 P 奥谷
- 22 日原滝上谷力口-谷川吾本谷火打石谷下部 11月21日~23日 (公式66)  
P 宮上 京田 佐伯 高成 室井 橋原 (OB) 平沢(候) 田中(将) 成瀬
- 23 大岳山 11月22日 P木下 有賀
- 24 表高尾 11月 日 P宮上
- 25 箱根神山 11月23日 P龜山 他
- 26 川苔真名井沢 12月24日 P福田 他
- 27 武尊岳冬山合宿 1954年1月2~5日 (公式67)  
P 奥谷徹 米野弘昭 山中冨佐子 岩崎元子 坂井定雄 小林一三 京田守弘 佐伯岩夫  
室井崇正(食糧) (記録) (器具) (医療) (燃料)  
(OB)田中將利(CL) 菅田英次(SL) 中野英司(会計) 山口應弘 鈴木輝夫 成瀬泰雄  
計15名  
1月1日 菅田以下13名出発

- 1月2日 (晴) 大雪 (6825) —— 上礪山家蓋 (1335) 午後スキー練習
- 1月3日 (晴) 午前中スキー練習 午後全員で奈倉沢に八〇建設、南谷、米野、佐伯、坂井の4名入る。他は宿に帰着后部屋が荒され金品の紛失されているのを発見。駐在が来たけれど盗品は不明。
- 1月4日 (雪) 急報によりAC撤収。田中未着。スキー練習、武蔵岳全曇登頂とやめ。盗難は金はなかつた金と今日持参した金で宿の支拂をやっとすませ明日合宿を打切ることとした。
- 1月5日 (快晴) 午前中スキー練習。山、家 (1500) —— 樺樹山 (1525) —— 氷上
- 28 越後中里スキー 1月15~17日 P 坂井 他
- 29 裏高尾 1月24日 P 福田
- 30 川苔山雪中幕営練習 (公式68)  
オ一次 1月30~31日 P 宮上(L) 池田 高成 恒石
- 31 同  
オ二次 2月6~7日 P 坂井(L) 京田 木下 佐伯 楠原
- 32 草津スキー 1月31日 P 鈴木(OB) 南谷 山中
- 33 雲取山 2月27~28日 P 山中 岩崎
- 34 大岳山 3月15日 P 林
- 35 大岳山 3月21日 P 南谷
- 36 鷲冠尾根春山合宿 (公式69) 3月27日~4月4日 1953年度目標  
P 林武志 福田宏二郎 米野弘躬 川口和雄 岩崎元子 下石辰勝至 池田務 木下康彦 京田行弘

佐伯岩夫 計11名 (本文参照)

編 集 後 記

〇 丸一年半振りにはやつと部報が出ることになった。西高山岳部健在也。トサカ星狼のみを取りあげてしまつたが決して色づきがなかつたわけではない。資金がなかつたのである。トサカ報告一つで我々の登方が判つて載ると思う。

〇 本年度の予算は四万九千円、おかげですゝある冬山装備がととのつて来たが、大人教主義をとる山岳部としては全然不足。

〇 彷徨、新人の中には辞書に手をかりぬと読めぬ者もある。「サスライ」はまだいゝとして「サマヨイ」を口づつても我々が遭難一歩手前のハン口クノ森で味気ない。迷惑にしたところで我部の性格とは必ずしも一致しかねる。部報に「彷徨」が命名(田号より)されてより既に五年目であるが当時の高松山岳部論議かなりし頃の部内部をもじり命名されたものである。しかし今となつてはチクハクな感こゝろあれ、我々の行動から切り離すことの出来ぬなつかしさ愛しさこの「彷徨」二字に感ずるのは編集子一人ではあるまい。我々の行動が軌道にのつたとは云え無意識の内には事を運ぶことはいないであろうが。安易さには必ず常に高きもの、新しきものへの我道を求めるその苦悶こそスホーツアルピニズムの根底であり、ひいては「彷徨」の眞の意味ではなかるうか、今年度の目標はさよさらばにして冬の山々は新装し馳足をやってくる。同志よ斗あつ

(MASA)

一九五四年度部員名簿

顧問 敬官

- 平山 清太郎 (体育) 杉並区高円寺三ノ二七〇
- 篠崎 武 (生物) 西荻ノ郡大久野村一七一八
- 中村 伍郎 (口語) 中野区大和町三一六
- 松本 朋 (体育) 杉並区和泉町九二八

現役部員 (一九五四・一〇現在)

与織 A名

住 所

- |                 |                       |              |                     |
|-----------------|-----------------------|--------------|---------------------|
| 三C 田口 毅         | 杉並区上高円寺四ノ一八二八         | 三B 千葉 瑞美     | 杉並区下高円寺二ノ六三七        |
| 二G 下石坂 勝至       | 杉並区方南町一三四             | 二F 楠原 穰治     | 荻谷区金王町三             |
| 二G 京田 守弘 (O・L)  | 杉並区阿佐ヶ谷六ノ二二三          | 二G 有賀 正純     | 杉並区阿佐ヶ谷一ノ八三一        |
| 二E 佐伯 岩夫 (S・L)  | 三丁市牟礼三九九              | 二G 伊藤 耕一     | 杉並区西荻窪三ノ五           |
| 二H 木下 康彦 (S・L)  | 杉並区馬橋一ノ三九九            | 二G 大行 眞知子    | 杉並区和泉町六二五           |
| 二D 池田 務         | 杉並区永福町四六一             | 二G 野本 紀子     | 杉並区荻窪三ノ一三五          |
| 三C 坂井 定雄        | 中野区本町通六ノ五             | 二G 眞善 志雅子    | 三丁市下連雀二七六           |
| 二F 田所 孝哉        | 杉並区和泉町四七一             | 二H 室井 恒正     | 杉並区永福町四二〇 (32) 三四一六 |
| 二F 宮上 和正        | 中野区大和町一五七             | 二C 高山 一彦     | 杉並区西高円寺一ノ一二五        |
| 二H 稻葉 吉正        | 杉並区阿佐ヶ谷二ノ六四四          | 二E 北村 護行     | 三丁市上連雀字通南三五六        |
| 二E 恒石 幸正        | 杉並区和泉町七二三             | 二C 尾形 中光     | 中野区千代田町二五           |
| 二H 高橋 邦夫 (資料記録) | 杉並区和泉町七二三             | 二H 田中 昇      | 杉並区馬橋二ノ一五〇          |
| 二H 丸 亮敏 (会計)    | 杉並区高円寺四ノ五七カ (38) 一八六六 | 二H 斎藤 宏      | 武蔵野市古賀寺二七五七         |
|                 |                       | 二H 万本 盛三     | 杉並区阿佐ヶ谷二ノ五九八        |
|                 |                       | 病氣休部中三H 田中康之 | 中野区桃園町一四            |

正部員6 準部員12 新入15 合計33名



OB名簿

★印は西朋登高会及員

卒業生 氏名

現住所

備考

二四 安 藤 英 祐 杉並区阿佐ヶ谷六ノ一二六(39)六三二七

早大出岳部OB 富士工業勤務 (才一三代チーフリーダー)

二二 小 池 吟 爾 目黒区上目黒八ノ五七〇 ( )

理科大学山岳部OB 大同毛織勤務

二三 富 田 雄 幸 静岡県駿東郡長泉村三軒家一九五才寮

農工大卒 大同毛織 (才二代チーフリーダー)

二五 川 瀬 良 一 武蔵野市吉祥寺八一四

東京大法学部

二五 木 村 紮 目黒区下目黒四ノ九四五(49)一〇〇九

早稲田大理工学部

二五 中 川 浩 一 中野区桃園町一九(38)一七一

教育大大学院 (才四代チーフリーダー)

二五 中 村 秀 雄 世田ヶ谷区松原一ノ五一(32)二六八一

青山学院大卒

二五 南 波 貞 敏 世田ヶ谷区松原三ノ七三〇

早稲田大理工学部

二五 林 春 彦 杉並区永福町二五五(32)三〇三二

東京大工学部

二五 神 谷 茂 世田ヶ谷区等々力町二ノ四四六

横浜国大山岳部OB 松下電器

二五 千 野 幸 美 中央区日本橋本町二ノ七ノ七南邦製菓

慶応大山岳部OB 南邦製菓

二五★山 田 昭 杉並区松ノ木町一ノ一九六

中央大卒 帝国地方行政学会

二六 神 島 一 郎 杉並区西荻窪一ノ二〇(39)二〇四三

東京大法学部 山岳部マネージャー

二六 笹 野 幸 夫 杉並区大宮前四ノ四七一(37)四六〇四

成蹊大政経学部 (才五代チーフリーダー)

二六 高 橋 洋 文 杉並区成宗一ノ五三

東大法学部 WV部員

二六 横 川 勇 杉並区阿佐ヶ谷三ノ四七八(39)二五二七

慶応大法学部 WV部員

二七★笹 田 英 次 中野区仲町一三

日本大工学部

二七★佐 藤 信 治 八王子市本郷町二〇(金)一三六

中央大経済学部

二七★鈴 木 輝 夫 世田ヶ谷区比次二ノ一九二

武蔵工大 山岳部員

二七 竹 内 章 杉並区仲通町五

武蔵大経済学部 山岳部員

二七★田 中 將 利 中野区大和町一八〇(38)〇八七五

早稲田大政経学部 山岳部員 (才六代チーフリーダー)

二七★田 中 賢 杉並区馬橋二ノ二五〇

中央大文学部

- 二七 女 山口 雄弘
- 二七 女 長崎 正純
- 二七 女 中野 英司
- 二七 女 西本 徹
- 二七 女 平澤 勇
- 二七 平澤 一郎
- 二七 女 松田 朝夫
- 二七 女 森 沢 拓治
- 二七 村田 博之
- 二八 女 棚 藤 鈴夫
- 二八 岩 堀 守三
- 二八 佐 藤 充弘
- 二八 今 井 言
- 二八 女 成 頼 希雄
- 二九 女 伊 藤 弘美
- 二九 女 岩 崎 元子
- 二九 飯 塚 康史
- 二九 小 田 尚於
- 二九 川 口 和雄
- 二九 川 村 宏
- 二九 女 龜 山 敏子
- 二九 斎 藤 忠正
- 二九 下 出 重遠
- 二九 岡 水 徹
- 二九 高 橋 信
- 二九 竹 内 徹
- 二九 戸 田 清
- 二九 林 武志
- 二九 女 福 田 安二郎
- 二九 女 山 中 島 佐子
- 二九 米 野 弘美

- 杉並区井荻二ノ一五三(39)四五二
- 中野区本町通五ノ二一
- 杉並区和泉町一四八(36)〇五七二
- 新宿区百人町三ノ三一〇(35)〇四六五
- 武蔵野市吉祥寺一九〇一
- 杉並区大宮前四ノ五〇九
- 渋谷区千駄ヶ谷一ノ五五三
- 新宿区馬場下町
- 杉並区永福町四七
- 杉並区高円寺六ノ七〇六
- 杉並区
- 杉並区下高井戸一ノ二〇二
- 杉並区教場三ノ二一六(37)〇三九三
- 杉並区高円寺六ノ七五四
- 杉並区大宮前二ノ七一
- 三ノ市年礼二〇〇五
- 中野区上野原町五
- 中野区宮園通二七(38)八二八八
- 武蔵野市吉祥寺一九一五
- 武蔵野市吉祥寺二七六九(武)三五七二
- 杉並区大宮前三ノ一五〇
- 杉並区丹次一ノ一二二
- 杉並区下高井戸四ノ九六三
- 杉並区高円寺一ノ二
- 杉並区阿佐ヶ谷四ノ九六八
- 杉並区高円寺七ノ九三九
- 武蔵野市吉祥寺四七八
- 杉並区久我山三ノ九七
- 武蔵野市南前八八二
- 杉並区大宮前六ノ四〇一

慶応大文学部 WV部員  
慶応大文学部

東京大文一 山岳部員

早稲田大政経学部

早稲田大理工学部 山岳部員

東京大政経学部

電機大

早稲田大理工学部

早稲田大理工学部

水産大

東京大政経学部

早稲田大学政経学部

早稲田大文学部 WV部員

早稲田大理工学部

大正海上火災

荻原校養学部

中央大経済学部

早稲田大商学部 山岳部員

教育大文学部

実践女子大

東京大政経学部

農工大 山岳部員

才一銀行澁谷支店

(才七代チーフリーダー)

(才八代チーフリーダー)

(才九代チーフリーダー)

「彷徨」 才12号

昭和廿九年十一月一日発行

発行責任者 京田守弘

発行者

東京都杉並区大宮前三ノ一八

都立西高山岳部